

転換点としての「東方巡礼」

石橋, 邦俊

<https://doi.org/10.15017/2332609>

出版情報 : 文學研究. 85, pp.67-97, 1988-02-29. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

転換点としての『東方巡礼』

石 橋 邦 俊

1929年後半から31年4月までのほぼ二年間、比較的長い中断をはさんで完成された『東方巡礼』（1932年刊）はヘッセがそこに注ぎこんだ精力を考える時、いかにもささやかに見える。ページ数にして前作『ナルツィスとゴルトムント』の四分の一にも満たず、また次の大作『ガラス玉演戯』の壮大な構成も未だ有さず、一見茫漠たるこの作品の情趣は少なからぬ読者にとまどいを与えたい。

最大の原因は作品にヘッセが盛りこんだ実に様々な「謎かけ」(Anspielung)にある。例えば、出版の年、1932年の小文『共同体を求めて』にはヘッセ自らこう記さざるを得なかった。

『東方巡礼』と「結社」の雰囲気が、時を知らぬ一種精神的なものなかで共に生きること、多くの時代、文化、土地、詩人、そして思想家の様々な理念とイメージの中で共に生きること、これを異質と感じた読者、己れの書庫を世界の代用とした遁世の隠者の戯れとまで感じた読者も少なくない。(中略)私のメルヒェンについて耳にした判定のうち、ひとつだけ私が呆然自失し、暗鬱な思いを味わったものがある。こう自問し、また私に問いかけた読者がいた、一体この作品は本当に真剣なものなのか？万事、愉快的幻想の戯れで、軽く読者を茶化しているのじゃないのか？こんな誤解まで生まれたとは、この作品に対する異議であると思う。これを書いている時以上に真剣な気持ちだったことは決してないのだ。¹⁾

しかし、出版前後の書簡に時おり表明されている理解されぬくやしさと少数の理解者への喜びに交じって、こうした危惧が既に作品の成立時のヘッセの胸中にあったことを推測させる手紙がある。

『東方巡礼』読了とのこと、嬉しい報らせでした。(…) 貴女の判定が僕には重要なのです。この作品では少々個人的過ぎたのではないか、プライベートなものを込め過ぎたのではないかと幾度か自問していたもので。これで、作品が含んでいる中心的な主題やアピールが貴女に全く純粋に反響しているのがわかりました。シンボルそれ自体が読者に「明瞭」になる必要は全くありません。「説明」という意味で理解されるべきではないのです。読者は様々なイメージを自分の中に取りこみながらその意味、そのイメージの含みもつ人生への比喩をのみこむのです。意識されずとも効果は顕われてきます。⁽²⁾

1931年5月、『東方巡礼』完成直後に A.ロイトホルトに宛て書かれたこの文面には「謎かけ」に対するヘッセ自身の態度が明瞭に読みとれるであろう。更に、それが単なる作品の装飾でも「愉快的幻想の戯れ」でもなく、この作品の中心主題では無論ないまでも、それから切りはなし得ぬディテールであることも。事実、この手記（『東方巡礼』）の筆者 H.H.の述べる東方巡礼団は、これら「謎かけ」の人物たちをぬきにしてはその存在すら語れないのである。

「東方巡礼」とは何か？

筆者 H.H.がかつて属していた東方巡礼者の結社とその巡礼行は人類の歴史において「ヒュオンの昔、狂えるローラントの昔」以来、第一次大戦後にいたるまで何人もあえて試みなかった旅である⁽³⁾。H.H.が結社に入会したのは大戦後のこの時代である⁽⁴⁾。結社の旅は後に忘れられ、また悪評すら被った

が、当時、敗戦国の人々に驚きと賛嘆と非難の渦を巻きおこした。飛行機、自動車、鉄道といった近代的旅行手段は放棄されていたが、「英雄的な旅、魔術的な旅」と呼ぶに足るもの⁵⁾であり、あるグループはアルベルトゥス・マグヌスにひきいられてモントメアを經由しファマグスタへ到り、またあるものはジパングの東に蝶の島を発見した。

東方巡礼団には全体としての大きな特定の目標があった（これは結社最高の機密であり、絶対に口外できぬと H.H.は記している）が、同時にメンバーは各々個人的な旅の目標を有していなければ入会を許されなかった。H.H.の場合、彼の目標、彼の夢とは、千夜一夜の女王ファートメ姫に会い、その愛を得ることである。

H.H.はこうしてある巡礼隊の一員となって旅に上る。この時、東方巡礼のより深い意味が見えてくる。一見、時間的にも空間的にも制約されているこの旅は、時代を超えた「魂の永遠の流れの、黎明と故郷を求める精神の永遠の運動のひとつの波」⁶⁾なのである。この旅人たちが目指す東方とは、地図上のどこかではなく、「魂の故郷であり青春であり、遍在し存在せぬところ、あらゆる時のとけあうところ」⁷⁾である。その東方を目指して H.H.は時にはグループで、また時には一人で、十世紀に夜を過ごし、妖精たちのもとに宿をかり、かつての妻と川辺を散策し、若き日の友と盃を交わし、少年にもどってカワウソを眺め、またサンチョやゴルトムント、ヴィティコーと馬を駆ったりした。当時の幸福を彼はこう記している。

実際、私の幸福感は、つきつめてみれば夢の楽しみに似ていた。およそ思い及ぶ限りのものをすべて同時に体験する自由、内と外を戯れにとりかえてみる自由、時間と空間を舞台の小道具のように動かす自由である。私たち結社の同胞は自動車も船も使わず世界を巡歴し、戦争で動揺した世界を私たちの信ずる心の力で樂園としたが、同じように、過去のもの、未来のもの、詩の世界のものを現在のこの瞬間に呼び出し、これ

にかたちを与えた。¹⁸⁾

旅の途上で彼はいくつかの不思議を目撃し、様々の人物に出会う。詩人ラウシャー、画家クリングゾール、パウル・クレー、魔術師ユップ、煙手品師コロフィーノ、「薄情者」ルイ、アヤメを手にしたアンセルム、「東洋人」ニノン、ノアの裔ハンス・C., フルートを吹く黒の王等々。そしてH.H.の旅はブレームガルテンの宴に頂点をむかえる。オトマールがピアノを弾き、獣は人語を話す。占星術師ロングスの傍らにはハインリヒ・フォン・オフターディングンの顔が見え、ドン・キホーテが夜警に立ち、パウロはあし笛を奏で、ブレンターノ、フーゴー・ポルフ、ホフマン、史官リントホルストたちが集った。以上が五章からなるこの作品の第一章に描かれるH.H.の巡礼行のあらましである。

問題の「謎かけ」が頻出するのはこの第一章と第五章であり、そのいくつかは後者で一種の謎解きが提出されるのだが、その謎解き自体新たな「謎かけ」であるといった有様で、一般の読者はもとより、研究者をも混乱させる。それをほぼ決定的といってよいほどの精密さで解き明かしているのがヨーゼフ・ミレクである¹⁹⁾。(無論、ここでは前掲の書簡に表明されているヘッセ自身の考えには目をつぶらねばならないが。)

ミレクの謎解きの基本的な姿勢は、この作品をヘッセの実人生の昇華された像とみなし、結社への入会が1920年のモンタニョーラ転居、H.H.の東方巡礼は『シッダールタ』執筆時、結社からの脱落を『荒野の狼』の頃と捉えるというおおまかな外枠の中で主に伝記的な事実に戻元しながら解明しようというものである。彼の論を抄出してみよう。文学作品の登場人物や詩人たちが全くヘッセ自身の好みで選ばれているのは言うまでもない。H.H.たちの旅も、ヘッセの1923年から29年までの数度の講演旅行、とりわけ『ニュルンベルクの旅』(1925)を暗示している。例えば、彼らがHutzelmännleinを目撃して、旅がブラウボイレンへ向かっていると察するのは、『ニュルンベルクの

旅』の動機をメルヒェンの次元に置きかえて表現したものである。旅のルートもおおよそ重なりあう。作品中のシュパイヒェンドルフはトゥットリンゲン郊外のシュパイヒンゲン、古い壁画のクリストフォルスが手をさしあげて道を教える三叉路の礼拝堂はこのシュパイヒンゲンの Dreifaltigkeitskirche、また、Kronenwächter と結社の対立関係は、ヘッセに批判的であったヴェルテンベルクの極右派新聞を揶揄したものであろう。ヘッセの友人たちも登場している。ツューリヒの市街を航行するノアの方舟 (Arche Noah) の主ハンス・C.とはヘッセのパトロンであったハンス・C. ボードマー (“Arche”はその邸宅の名称“Zur Arch”に由来する)、ウィンタートウアのフルートを吹く黒の王はゲオルグ・ラインハルト（東洋美術の優れたコレクターであったことから作品中では H.H.たちが中国の寺院に招かれたことになっている）等々、ほとんどの人物に現実のモデルがあることになる。

ミレクの詳細な謎解きは、己れの幻想に酔いしれているかにみえるこの作品にヘッセが実に周到に彼の現実を隠しこんでいるのを教えてくれる。

では、幻想に塗りこめられた東方巡礼とその結社が意味しているのは何であろうか？

ミレクはこれを唯美主義 (Ästhetismus) と解し、これがヘッセの宗教的出自に由来すると説明している。『デミアン』から『荒野の狼』までの自己追求と『ゴルトムント』の夢想の後、ヘッセの眼ざしが人間のうちなる精神性と官能性の葛藤という心理的次元から共同体への適応という倫理的次元に移された時、ここ（1920年代末から30年代初頭）に生じた芸術家としての、また人間としての危機克服のために⁽¹⁰⁾、『ヘルマン・ラウシャー』(1901)にまずはっきりと表明された唯美主義が再帰した、さらにここから生じるディレンマから共同体への自発的な義務づけ（『ガラス玉演戯』）が提出されるというのがミレクの位置付けである。「ハラーは己れの動物性に抗いはするが、これを手なづけることができず、自ら選択した孤立の中で窒息してゆく。ナルツィスは生の衝動をみごとに統御し、かつ、社会的な欲求を修道院という狭い

枠内で満足させることができる。H.H.も同じくこれの純化に成功する、そして社会から隠れ退きながら、そこに彼と同様の精神の集う、広大かつ同質な共同体を発見するのである¹¹¹⁾、つまり『東方巡礼』の唯美主義とは、何らかの意味で一種の避難所であることになる。H.H.のファンタジーの国と味気ない日常世界の対比を、ラウシャーの不思議の国アスクと平凡なキルヒハイム、ハラーの現実と理想に並置し、更にラウシャーのメルヒェンを「彼の避難所」、ハラーの不滅者を「彼の希望」、そしてH.H.の結社を「実現された夢」とよんでいることからミレクの立場は明らかである¹¹²⁾。「東方巡礼」は単なる逃避としての唯美主義だろうか？

少なくともヘッセ自身はそう考えていなかった。先に一部を引いた『共同体を求めて』では、「謎かけ」に多少の無駄を認めながらも、現に開花しつつある文化を持たない現代人にとって、宗教、哲学、芸術の「時を知らぬ世界」にしばし生きることは、「忍耐とフモールと、理解への新たな意志と、生けるものへの、その苦境と誤りへの新たな愛で武装して」日々の問題へ立ち帰る力を与えてくれると主張し¹¹³⁾、1931年11月24日、カルロ・イーゼンベルクに宛てた手紙には『東方巡礼』を「信仰告白」、「現代の趨勢とは相反する流れへの檄」、更には「死を賭した戦い」とまで呼んで、逃走では決してないと強調している¹¹⁴⁾。しかしこうした作家自身の言葉も、彼が様々な「謎かけ」、それも全くヘッセのプライベートな領域に属するものまでも敢えて持ちこんだ、その理由を説明してくれはしない。ノアの裔、ハンス・C.やヴィンタートゥアの黒の王が一般の読者に何の関わりがあろうか？作品に不可欠なアトモスフェアをかもし出すとしても、やはり装飾の域を出ないのではないだろうか？

奇妙に思えるのは、時を超えた領域に属し、一見、気まぐれな幻想の迷路にまよいこんでいるかのようなH.H.の東方巡礼に明確な時代的地理的な枠を与えられていることである。「東方巡礼」全体は第一次大戦後のドイツの状況を離れては語り得ないし、ミレクの論を参照すれば、H.H.の旅は（更に第三

章以降の舞台も）ヘッセ自身の伝記的現実と不可解なくらい符合することになる。『東方巡礼』の「謎かけ」はファンタジーの戯れでありながら、むしろ同時に作家自身の現実の側に向けられている、ヘッセがこの作品の過度な個人的性格に危惧を抱いたのは、「謎かけ」があまりにも放恣な幻想であるという以上に、それが彼一個人の生（Dasein）に強く根づいていたからだろう。これは完成された作品の読者より、創作途上の作家の側に関わる問題である。

第一章の大略からも察せられるように、この作品には二種の「謎かけ」が混ぜこまれている。第一に友人、知人、及びヘッセの生活圏に属する伝記的、地理的なもの。いずれも作品中では H.H.の幻想という仮面をつけて現れるが、この場合、『クリングゾールの最後の夏』（1919）の手法が意図的に適用されていると見てよい。『クリングゾール』（とりわけ「山の女王」訪問とその後の酒宴）では幻想と現実とが不可分に混じり合い、或いは幻想が現実を圧倒し、一種、神秘的な文学空間をつくりだしていた。『東方巡礼』ではヘッセの実人生を同じく（しかし、意図的に）、ファンタジーの力で浮遊させることで、「東方巡礼」もしくは結社という、未だ明確なたちに結晶し得ないイメージにリアリティ（少なくとも作者にとっての）を保証し、これを現実の世界につなぎとめようとしている、つまり、言い難いなものか（或いは、言ってはならぬなものか）¹⁵¹を現実のものとして言い表すために、ヘッセは全く個人的な素材をあえて用いたわけだ。同時に、夢を現実に繫留するとは単なる唯美主義ではなく、夢を個人の領域から万人に開かれた場へうつしかえることである。内を外に映しだし、外を内にとりこみ、内と外を自在に交換するという「魔術的思考」が、かつてそれが有していた先鋭さ（それは『クリングゾール』当時のヘッセの思念の緊張を示すものだが）を脱して、ここではひとつの手法とされるまでに消化されている。

「結社」は『東方巡礼』において初めてヘッセの脳裡に浮かんだテーマではない。1921年の日記にあらわれている「個人の成果もあやまちもすぐさま無名となる大河」（「例えば以前の教会の世紀、教父たちのもとでそうであっ

たように)¹¹⁶⁾への憧憬は『ゴルトムント』のマリアブロンに初めて明確なたち¹¹⁷⁾をとるまで常にヘッセの創作の傍らにあったであろう。しかし『東方巡礼』の「結社」には中世カトリック教会の、そしてカスターリエンの確かなイメージはまだ与えられていない。この茫漠とした想念、或いは予感をまず自分の内で補強するために、このいたって個人的な第一の「謎かけ」が必要だった。

第二の「謎かけ」に属するのは古今東西の文学、哲学、芸術中の人物たち、シッタールトやクリングゾールといったヘッセの作品中の人物たち、更に『狂えるローラント』『オベロン』からの引用である。ミレクが軽く指摘しているように、このグループの「謎かけ」がすべて例外なくヘッセの「精神的同行者」¹¹⁸⁾である点では第一のそれに等しいのだが、その役割は単に作家の精神世界の奥行きをなぞってみせるにとどまらない。『狂えるローラント』『オベロン』からの二箇所直接引用を最も明らかな例として、この第二の「謎かけ」は読者の視線を筆者である H.H. からそらし、手記の個人的性格を薄め相対化してしまう。『荒野の狼』の「ハリー・ハラーの手記」はゲーテやモーツァルト、ブラームス、ワーグナーを登場させながらも、ハラーの内面世界の記録としてどこまでもハラーに集中していた。『荒野の狼』という作品の堅固な構成あってのことだろう、ハラーはある時代におけるある世代の危機の体現者だが、この危機を自ら克服しそれを作品として定着させるために、ヘッセは「カノンかフーガのように厳格な構築」¹¹⁹⁾をスプリングボードにして、作品の世界に全身をさらしてみせたのである¹²⁰⁾。『荒野の狼』では当時のヘッセの生活感情が作品全体のトーンを決定している。これに対し『東方巡礼』は、この「謎かけ」故に、H.H. という個人に集中することもなければ、また手記という一人称の性格上、全く遊離してしまうこともない。H.H. にしても、ミレクが詳細に解いてみせたようにヘッセの精神的履歴を写すことで血肉を与えられていながら、その歩みが『神学断想』(1932)の三階梯思考パターン(もしくは思考モデル)の忠実な具体化であるという点で「個人的」でありなが

ら「個人的」でないという二重の性格をもっている。（意図的に「浅く」された一つまり作中人物，事件への「のめりこみ」の少ない— 報告体の文体がこの印象を更に強めている。）

このように二種の「謎かけ」は，一方が夢を現実につなぎとめ，他方はそこに作家の「個」を離れた広がりを与えようとするという相反する方向を有している。つまり，「個人的」世界から発しながらもこれを閉ざされた場としてでなく，より「無名」な（もしくは「多名」な）ものとしようとする『東方巡礼』という作品の指向のあらわれである。ミレクの言う唯美主義とは，これはむしろ逆のものだ。現実から美的世界への逃避ではなく，精神世界から現実へ向けられた警告である。にもかかわらず，それが作品の中に芸術の世界への逃避と見えかねぬ表現として定着されざるを得なかったところに，例えば『荒野の狼』とは全く異なったヘッセの立場を垣間見ることができる。

『デミアン』以降，ヘッセの創作姿勢には，時代の問題を己れに引きうけこれに文学的形態を与えて彼なりの解答を提示しようという傾向があった。これは作品に『東方巡礼』とはまた異なる個人的性格を与えているが，その中心にあるのが，1921年の日記にはっきりと言明されている「告白としての文学」である。

文学を告白と解するならば（私には今そうとしか思えぬのだが）芸術は入りくみ曲がりくねった，一本の長い道だ。その目標は，個を，芸術家の自我を，完全に，枝葉に到るまで，心のひだひとつひとつに踏み込んで言いつくすこと，この自我が最後にはいわば解きほどかれ虚となるほどに，力を発散しきり燃えつきてしまうほど完全に，述べつくしてしまうことだろう。そうしてこそより高次のものが，個と時を超えたものが到来し得るのではないか，芸術は克服され，芸術家は聖者たるに熟すのではないか。芸術の機能とは，それが芸術家の個そのものにかかわる限り，懺悔や精神分析のそれと全く同じなのではないか。²¹⁾

「純粹な告白とは沸きたつ漿液の噴出、解放、外化、排気にほかならない」²²⁾、また、聖者の魂のうちでは「世の混沌が意味をもち音楽となり、その息の中を神が出入りする」²³⁾と記しながら、こうした告白、懺悔がいかに芸術家に困難であるかをヘッセは十分に認識している。芸術家という人種は告白、懺悔にすら一種の愛情を抱き、常にこれと同化しようとして、結局、告白をも一種の自己弁護、一個の作品にしてしまう。自己を解放するとは逆に、自分の「個人的事情という魔圈」に迷いこむのだ。聖者（アウグスティヌス）が自己を神に委ねきり、個を乗り越えるのに対し、詩人（ルソー）は自己を弁護し、己れのコンプレックスにからめとられてしまう。

『シッダールタ』中断期のこの日記には、自分の内なる二つのベクトルの領界を厳密に計量しながらも、相い矛盾するこの衝動に対するいらだちが隠されている。同年4月30日、G.ラインハルトに宛てた手紙には「私にとって聖者への道は芸術家としての生と製作の犠牲のうえを伸びているにちがいない」²⁴⁾と記しているヘッセだが、彼が求めずにはいられなかった理想が、あれかこれかではなく、「芸術家にして聖者」だったことは、『シッダールタ』と以後の彼の歩みにくっきりとあらわれている。とまれこの日記で見おとしてならぬのは、告白、懺悔、精神分析が十全に個を展開し、そののちに「個と時間を超えたもの」の顕現を準備すると捉えられていることだ。ヘッセにとって精神分析は、「我々の内に神の声を聴きとれる空間を創りだすことを目的としている」²⁵⁾ものだった。彼がインドや中国に求め、また見いだしたのは、この「空間」へいたるための靈的テクニク、そしてそこへ到りついた「聖者」たちが遺した知恵の言葉だった。これは単に彼の個人的興味より発したものではない。プラスマイナスの両面で否応なしに人を拘束しかたちづくるひとつの文化が崩れはじめた、彼の言う「ヨーロッパの没落」（少なくともヘッセにとっての）の中であって、ヘッセは自らをキャンバスとしてそこに新たな（ヨーロッパが既に見失ってしまったという意味での）思考法の可能性

を描いてみせたのだった。自分の焦眉の問題を解くことが、即ち時代に対してひとつの解答を与えることになるという一種、楽観的な使命感と責任感がここには見え隠れしている⁽²⁶⁾。その当否は問わぬとして、「告白としての文学」とはその個人的側面も超個人的側面も含めて、中期のヘッセに一貫した対文学姿勢である⁽²⁷⁾。

『東方巡礼』にあってもこの姿勢は受けつがれているかに見える。ミレクの指摘する数々の伝記的事実との一致、そして何よりも「手記」という一人称形の使用は重要な傍証だろう。

「手記」に対する H.H.の態度は章を追うごとにずらされていくが、これも「謎かけ」ほどではないにせよ、『東方巡礼』の一種の捉え難さの一因となっている。第一章冒頭、H.H.はまず「思いきってここにあの前代未聞の旅のことを短く書きとめておきたい」⁽²⁸⁾と記し、「結社」の一員となり旅に参加できたことを彼の幸運、彼のさだめと呼ぶ。第二章でもこの姿勢に変化はない。

旅を共にした最後の生き残りの一人として何としても、私たちの偉業の記憶をいくばくか救っておきたい。何だか自分がたとえばカール大帝の十二勇士の誰かに仕え、一人、老年を迎えた従僕のような気がする。彼の脳裡には輝かしい奇跡や功業がいくつもいくつも刻まれているのに、もし彼が言葉か絵か、文書か歌でそのいくらかを後世に伝えられなかったら、その情景も記憶も彼の死と共に消えてしまう。⁽²⁹⁾

しかし H.H.の筆はここで既に行きづまっていた。モルビオ・インフェリオレでの従者レオの失踪という一見ささいな事件から先へ進むことができず、彼の巡礼行同様、彼の筆もここで頓挫してしまった。第三章ではこれを打開するために友人ルーカスを訪問した次第が描かれる。

竹馬の友、ルーカスは第一次世界大戦の体験を本にした人物である。彼の東方巡礼評は皮肉な微笑をたたえた「好意ある懷疑」⁽³⁰⁾（「十字軍ごっこ」⁽³¹⁾）

だが、大戦記を書きとめたおりの体験は H.H.の今の状況を完全に裏書きしてくれた。鮮明に脳裡に刻まれた膨大な記憶もいざ文字にするとなるや、夢でもあったかのように遠ざかってしまう。仮に十倍も強く見事な筆になる十冊の本があり、読者も好意的であったとしても、戦争を読者自ら体験したの でなければ、何のイメージも伝えることはできないだろう。にもかかわらず本を完成できたのは何故か？それが必要だったから、「虚無、混沌、自殺から自分を救う唯一可能な策」⁽³²⁾だったからである。更に彼は、H.H.にとってレオが一種の固定観念になろうとしていると指摘する、「自由になりたまえ、レオなんて放り出してしまうことだ！」⁽³³⁾ルーカスはこの街に住むアンドレーアス・レオなる人物の住所⁽³⁴⁾を教える。H.H.はこのレオ氏訪問に踏み切れない、幾度も家の前まで行ってみるのだが。しかしこのくり返しは彼の生活に重心を与えてくれた。

一種の東方巡礼のレポートの類を書こうという私のプランは、日を追うにつれ、はっきりとまぎれもなく、エゴイズムであると思えてくる。はじめ私には、ある高貴な事柄のために労多き仕事を思いたったような気がしたのだが、今は、だんだん見えてくるのである、私の旅行記に私が求めているものは、ルーカス君が彼の戦争体験記に求めたものにほかならない、自分の生に再びひとつの意味を与え、かくして己が生を救うことである。⁽³⁵⁾

第四章で H.H.は遂にレオに出会う。間違いなくあの従者レオである。しかし自分を思い出させようとする H.H.の試みはすべて失敗し、とうとう口にした東方巡礼と結社のことも軽くなされてしまった。夜のこぬか雨、レオになついているシェパードのネッカー……すべてがレオと調和している中にとりのこされ、夏の夜の温もりにも自分の孤独にこごえながら帰宅した H.H.はレオに長い手紙を書く。自分の今の苦しみを訴え、共にしたかつての経験をつ

づり、仮令何があってもあの旅を記念し結社を賛えるために手記の完成は決してあきらめない、と。

事の成就それ自体はもう望ましいことでも、価値あることでもない気がした。価値があるのはただもうあのひとつの希望だけのような気がした。私の仕事によって、あの最高の時代の記憶に自ら奉仕することで、私自身を幾らか清め、救い、結社と結社での体験とのつながりを回復したいのだ。⁽³⁶⁾

翌朝遅く目覚めた H.H.を彼の部屋で待っていたのはレオであった(以下第五章)。結社からの使いであるという。H.H.はレオと共に出発する。以前同様、レオは非のうちどころのない従者だ、しかし心はやる H.H.には、教会で祈ったり古い市庁舎の由来を説明したりするレオの案内はいかにもまだるっこしい(「私たちがまるまる午前中を費やした道くらい、15分もあれば充分なところだ」⁽³⁷⁾)。やっと着いた巨大な結社の本部で H.H.は最上階に案内される。そこは一種の広大なアルヒーフで、何百メートルも書棚や書類の束が並んでいた。「誰も私たちが気にとめない、すべてが音もなく行われていた。ここから全世界が天空にいたるまで統治されている、いや、とは言わぬまでも整理分類され監視されている、そんな気がした。」⁽³⁸⁾しかしアルヒーフはレオの口笛を合図に更に広がり、そのがらんとしたホールの中央の席(三角形にせりあがり、頂点に玉座がある)を幹部たちが悠々と占めていった。H.H.について審理が行われ、手記の最大の障害だった守秘義務が解かれ、更にアルヒーフの利用が許可される。幹部たちが去ったホールの机には書きかけの彼の手記がおかれていた。それは今、全く不完全な混乱したものに思えてならない。彼の執筆姿勢の変化を簡潔にまとめた箇所。

私は気を鎮めようとした。自分に言いきかせてみた。確かにかつては

自由にはっきりとものが書けなかった。しかし、それはすべてが、結社への誓約によって他言を禁じられた機密の数々に関わっていたからだ。そこで客観的なルポルタージュの類は諦め、色々な高次における連関や、目的や意図は度外視して、私一個人の体験したことのみに限定するという逃げ道を試みてみた。結果が如何に相成ったか、既に見てのとおりである。今はもう何ひとつ沈黙の義務はない、何ひとつ制限はない。私には公に資格が与えられたのだ、それに汲み尽くし得ぬアルヒーフを自由につかえるのだ。¹³⁹⁾

結社の小史から新しく書き始めたいと考えた H.H.は、まずアルヒーフの利用法を知るために、いくらかの事項を検索してみる。しかしこの初歩においてすらアルヒーフの巨大さを思い知らされてしまう。結社の歴史などとても書けるものではない。幹部たちは H.H.を少しばかり遊ばせて、結社の何たるか、H.H.自身の何たるかを教えてやっただけなのだ。再び幹部たちが現れ、審理が行われる。今度は最高幹部自ら判決を言わたすという。その最高幹部は外ならぬレオであった。レオは法王のように金色の衣をまとって「しずしずと謙虚に、仕える者のように」⁴⁰⁾歩んでくる。「陽光のように柔らかく悦ばしい」⁴¹⁾その声が H.H.の深く恐れる罪、結社への不信、非難、そして結社の歴史を書こうとした思い上がりを「初心者 (Novize) の愚行」⁴²⁾と軽く片付け、全員の微笑をもって帳消しとした。しかしレオの言葉は続く。その声は暗く厳しく『ドン・ジョヴァンニ』終幕の騎士長のように H.H.の自覚なき罪を糾弾した。例えばこの日、結社に導かれる途路、彼はレオと共に教会に入らなかった、これは結社員誓約の第四条に違反する等々、彼の罪は猶予さるべくもない。しかし、H.H.の絶望は幹部たちの多くが味わったものであった。彼の運命も一つの試練だったのだ。「絶望は、人間の生を理解し是認しようとするあらゆる真剣な試みの帰結である。徳と正義と理性を失うことなくこの生を耐え、その要請を満たそうとするあらゆる真剣な試みの帰結である。

この絶望の此岸に子供は生き、彼岸には目覚めた者が生きている。」⁴³⁾ H.H.はもう子供ではないが、まだ完全に目覚めてもいない、彼を再び結社に迎えようとレオは幹部たちに呼びかける。しかし、こうして幹部の一員となる前に、H.H.は一つの試験を受けねばならない。信仰の証にとレオが提出する二つの試験を H.H.は受け入れないが、後になるほど難しくなるというレオの警告に第三の試験を選ばざるを得なくなる。H.H.自身のことをアルヒーフに照会せよ、というのである。幹部たちが去り、レオも去った。すぐにはふみきれない H.H.に、飛び出した整理票の「モルビオ・インフェリオーレ」の文字が眼にとまる。従者レオが失踪し、H.H.たちの旅が挫折したあの谷である。アルヒーフの該等箇所には、驚いたことに、H.H.の手記と、なお二つのあの旅の記録が収められていた。同じ旅を扱いながらも、この三者の何と異なっていることか！

どこまでも誠実に、自分の真実と思うところにしたがって書きとめられた報告であるのは明々白々なのに、この記録者の記憶がこんなにも曇った誤ったものなら、私自身のメモの価値などどこに残っていようか？ モルビオやレオや私について、別の十人の別の十のレポートが見つかったとしたら、おそらく全部が全部矛盾し合い、各々に自分の正しさを主張していただろう。ひとつの史実を記録しようとした私たちの労作など無だ、書き続ける必要などない、読む必要もない、このアルヒーフの棚に安らかにほこりを積もらせておけばよい。

これから経験するだろうことすべてを思うと、身中に戦慄が走るのを感じた。この鏡の中ではなにもかもがどんなにか歪み、ずれ、変形していることか、これらレポートとそれに矛盾するレポートと伝説すべての背後に潜んだ真実の顔の何たる嘲笑、何たる到り難さ！なおも真実たるものとは何か、なおも信ずるに足るものとは何であろうか？⁴⁴⁾

H.H.はもはや耐えきれず、彼の整理票の示す場所へ走っていく。

さりげなく書きとめられている H.H.の立脚点のズレは、叙述は如何にも簡潔ながら、巡礼行の揮発性の記憶とは異なって全五章の底を流れているモチーフであり、その変化は各章のコンテクストの中で十分に計量されている。ヘッセにとって『東方巡礼』は「不毛、闘い、痙攣、障害の時をただ待ちの一手で過ごし、忍耐によって克服するのみではなく、この困難自体を瞑想の対象とし、困難自体から新たなシンボルと新たな方向づけを見いだした」⁴⁵⁾作品だったのだが、時代との苦闘、創作途上の歯ぎしりのすべてを叩きこみ、当時の作家の生活感情がにじみこんだ「ハリー・ハラーの手記」とは対照的に、完成し作者の手を離れた『東方巡礼』にはそうした苦闘をしのばせる痕跡は全く見うけられないと言ってよい。まるで、執筆時の状況が反映し、作品が過度に個人的になるのを慎重に回避しようとしているかのようだ。『東方巡礼』には従来の「告白としての文学」にはなかった視点が現れている。

一度限りの東方巡礼と「結社」の記憶を、その最後の生き証人として書きとめようという「ある高貴なることからのための労多き仕事」のまぎれもないエゴイズム（ただし留保つき）に気付き、更には意味と目的を失った生の中、完成如何は問わず、ただ手記を書き続け、それによる救いと、「結社」とのつながりの回復のみが望ましくなるまでに追いつめられるというのは、共同体への憧憬の反面たる単なるエゴイズムの否定というよりむしろ、ひとつの問題が個人の問題として内面化され深化し、その絶望の極に恩寵としての救い（或いは厳しく深められた自己認識）が訪れるというヘッセ中期文学のひとつのパターンをなぞってみせたものである。H.H.がレオに宛てて「壊れた甕からほとばしる水のように」⁴⁶⁾嘆き、訴え、自己告発を幾ページも書きつづる手紙は、1921年1月の日記に言う「告白」（「沸き立つ漿液の噴出、解放、外化）そのものであり、その後「恩寵」としてレオが現れる。しかもこの最大の絶望の時にも、それを描くヘッセの筆には、作中人物への作者の自己投入から生ずる、ヘッセ文学特有の「熱」はさほど感じられない。作品の枠

をなす「謎かけ」では全くプライベートな素材まで敢えて選択したヘッセが、H.H.の歩みにおいては一種のパターンをこれにあてはめ、個人的な要素の混入を避けようとしている。H.H.の手記の文体も同様に、一律で直線的な叙述ではなく、中心にある方向とは一見無関係な（或いは次元を異にする）省察、独白が集中を妨げる。作者と作品の密接な結びつきを保証していた「告白としての文学」という従来の対文学姿勢が、『東方巡礼』では、完全に放棄されぬまでも、いまひとつ別の視点から相対化されているのだ。

これは第五章で、ヘッセ自身の筆であっさりと表明されている。上掲の二つの引用箇所がそれで、第一の箇所では手記の最大の障害が結社の機密の守秘義務にあり、それ故に「色々な高次における連関や、目的や意図は度外視して私一個人の体験のみに限定するという逃げ道を試みた」という。読者に対して最後まで空欄のまま埋められない結社の機密とは、H.H.の思わせ振りの態度とは逆に、本来言い表わし得ぬもの、沈黙するよりほかないものであり、シュヴァーベンで結社を捨てる若者への弁者の言葉が暗示しているように、人間の心奥に宿るポエジーそのもの、或いは詩の世界である（この点については後述）。直接に叙述できないこのものを自分一個人の体験の次元で輪郭づけるとするのは、『東方巡礼』執筆の時点で顧みたヘッセ中期文学のありかただったろう。「結果が如何に相いかなかったか」、H.H.の筆は彼自身のバラバラな記憶の破片に惑わされ、H.H.という個人を抜け出せなかった。第二章の終わり近く、H.H.はこう記さざるを得ない。

私たちの東方への旅とその礎である共同体、私たちの結社、それは私の生涯で最も重要なもの、唯一重要なもの、これに比ぶれば私自身など全くの無と思えるものなのだ。そのくせ今、この一番大切なものを、いやとまれ、そのなにかしかを書きとめ残しておこうとすると、何もかも、ひとつのモノに映っていた様々の映像の塊の、砕け散りゆく破片に過ぎなくなる。それにこのひとつのモノというのは私自身の自我であり、こ

の自我、この鏡は、私がこいつに問いかけようとするときまって、ひとつの無なのがある鏡面のそのまた一番上っ面なのがわかってしまうという代物なのだ。⁽⁴⁷⁾

鏡面にとどまる限り、鏡の底の真実は知ることも語ることもできない。第二の引用に言うように、鏡面の記録は如何に誠実であっても、相い矛盾し自己の正しさのみを主張する。ハリー・ハラーはこの破片の画廊たる「魔術劇場」で絵の世界を生き直し体験し直すことで、自己の何たるかを再認識し、「不滅者」たりえぬにせよ、精神と詩を失った世界の中で生き、これを愛する術（フモール）のヒントを獲得したが、今、『東方巡礼』にあつて問われているのは、鏡の底の真実を見つめこれを守り、精神と詩を排撃する世界に抗して生き得るか否かである⁽⁴⁸⁾。既に、自己と時代の一致という、従来の楽観的な予見は失われている。『荒野の狼』に対する世間の反応にヘッセはいたく失望し、改めて孤立の感を強くしていた。1927年の書簡には、友人たちに宛ててすら、彼らの「市民的」な態度を激しく非難しているものがある⁽⁴⁹⁾。そして、1929年11月の朗読会は、募ってきた時代との乖離感を象徴する出来事であったらしい。11月8日、ニノン・ドルビンに宛てた手紙。

二つめの朗読会も済みました。(中略)外見は何もかも一年半前のあの頃と同じですが、僕にとってはすっかり変わっています。ひどい過労と幻滅でしかありませんでした。仕事をやり遂げるのに大変な苦勞をしました。緊張で震えが来ましたし、何の喜びもありませんでした。揚句の果てがこんな気持ち、「すべて無駄だ」。(中略)総じてテュービンゲンよりマシでした。痛みがほぼなくなっただけでも(腸は阿片を飲んでから、かなり正常です)。しかし、実のところはずっと悪い。大変な幻滅でした。自分の詩を朗読する、それも最大限の集中力で。すると少しばかり肩を叩いて認めてくれて、他の連中がシュニツェルやソーセージを食

ってるのを拝見でき、心の底の底まで凍りつくほど見放され見捨てられて、そこに座っているのです。⁵⁰⁾

この時の朗読会については12月、F.マルティヤ H.ヴェルティへの手紙でも触れ、後者では「イエスからゲーテに到るまでのあらゆる詩人、あらゆる思想に賭けて自分の生活を少しでも変えてみる人間など一人もいない。そのくせ自分の金や自国の「名誉」のためなら何のためらいもなく、すすんで何千人も死んで行く」⁵¹⁾とこぼし、細心誠実に仕事をする決意を述べながらも、世人の無理解をなじっている。『東方巡礼』にひかえめに表明されているヘッセの対文学姿勢の転換と、H.H.の歩みを相対化させ続ける「結社」はこうした如何ともなし難い時代との乖離感の中で生まれてきたのである。

かたちとしての「結社」の原型は『ゴルトムント』のマリアブロンにまず認めることができると思う。遍歴放浪の生活からナルツイスに助けられ帰還したゴルトムントの眼に映じたマリアブロン修道院のすがた、彫像も壁も柱も、数世紀来の思想、芸術、生活も、どれひとつ孤立することなく、ひとつの精神より生まれ、一本の樹の枝々のように同質である世界、ナルツイスはそこにかつての院長ダニエルと同様、ひとつの統一体、ひとつの秩序、ひとつの思想に仕え、己れを捧げきっている⁵²⁾。さすらい人の郷愁とは片付けられぬぬかがここでゴルトムントに語りかけている。おそらくそれは、「無常の克服」⁵³⁾としての芸術とは異なった意味でのひとつの「永遠」の顕われなのだろう。1921年の日記に表明されていた教父たちの時代への憧憬も遠く余韻を響かせている。「結社」のかたちの多くはカトリック教会より採られたものだろう⁵⁴⁾。

しかし、宗教者ではなく芸術家のヒエラルヒー的集合体がヘッセ自身の筆で書きとめられるのは1929年10月、11月、朗読会で幻滅を味わうわづかに前のころである。10月21日、H.ヴィーガントに宛てた手紙には「貧欲脳なしのゲルマーニア」⁵⁵⁾の状況はキリスト教とヨーロッパの良き伝統のみならず、か

つて「自然」と呼ばれていたものまでも根絶されたことに由来すると述べ、続けて「そこで私たちの為すべきはと言えば、これを承知でドン・キホーテの悲劇を演じ、私たちの行いと生で不足ならば、苦悩と死をもって精神と魂に一種の伝統、一種のサヴァイヴァルの可能性を与えてやることです」⁽⁵⁶⁾と書き、またおそらく同じころのものだろう、E.エグリには、人類の進歩は集団ではなく、良き意志を有する少数者において生まれ、彼らのなかに宗教や文化といった崇高なものが生ずる、それ故「私たちの使命は度し難い世間を教諭するのではなく、くりかえしくりかえし、この少数者を形成し、圧迫されているこの小さな神の国が死んでしまわぬようにすることです」⁽⁵⁷⁾と書き送っている。同様の思いは11月2日、K.ヴォルフ宛書簡には、自分の育った文化の溶解と消滅という時代の推移の中で捉え直され、「根源に帰って」⁽⁵⁸⁾今の時代を耐え、精神の少数者を（「時が来れば彼らにおいて再び、新しい信仰、新しい畏敬、そして精神と言葉の新たな正統が可能となるでしょう」⁽⁵⁹⁾）残そうとする者が同世代に一人もいないのを訝しんでいる。「結社」はヘッセの第一次大戦以後の精神の軌跡に連続しているのだ。翌1930年のエッセ『本の魔法』ではこうした精神の少数者への希求ではなく、その集団の存在が初めて語られる。

まあ良い。自然法則同様、精神の法則は変わるものではないし、廃止されるものでもない。司祭階級や占星術師集団を廃止したり、その特権を取り上げたりすることはできる。それまで少数者の秘密の財宝だった認識や文学作品を多数者の手の届くところに置く、いや、その財宝を知れと強いることもできる。しかし万事、ほんのうわつつらの出来事だ。本当は、ルターが聖書を翻訳しグーテンベルクが活版印刷を発明して以来、精神の世界では何ひとつ変わっていない。魔法は毫も欠けることなくお存在し、精神は昔同様、ヒエラルヒー的秩序を有する小エリート集団の奥義である。ただこの集団が無名（anonym）となっただけだ。⁽⁶⁰⁾

ヘッセはこうした集団を『東方巡礼』ではまず彼の精神的同行者たちによって満たした。既に述べたようにこれは、H.H.の手記という体裁をとるこの作品に、H.H.の個人的色彩を薄め、むしろ「多名な」（もしくは「無名な」）色調を与えている。しかし同時に、「結社」が頑固にヘッセ個人の精神世界に（少なくとも『東方巡礼』では）限定されているのも否めない。

ヘッセは大変な読書家であり、熱心な書評家だった。彼の書評は職業批評家のそれとは異なり、自分が読んだ良書を自分の読書体験にもとづいて推薦するといった一種の良書案内だが、ヘッセはこれを世間に対する文学者の義務と考えていた。ヘッセにとって書物は終生、人類の最高最大の精神財だった。1920年のエッセー『読書』は彼にとっての読書の醍醐味の在処を伝えてくれる。ヘッセはここで読者（或いは読書）を試みに三つの段階に分け、その第三段階をこう叙述している。

これ（第三段階）は、普通、人が「良い」読者と呼ぶものの反対のように見える。この第三の読者は自分の本に全く自由に向かい合う。それほど一個の人物であり、彼自身であるのだ。本を教養の資としようともしない。世界のあらゆるものと同じように、本を利用する。書物は彼にとって単なる出発点であり、刺激であるに過ぎない。（中略）完全に子供だと言ってもよい。彼はすべてのものと戯れる…ある観点から見れば、万物と戯れる以上に実り多いものはない。こんな読者はある本にすてきなセンテンスや、ある真理や知恵が語られているのを見つけると、試しにひとまず逆にしてみる。彼はとっくに知っているのだ、あらゆる真理のその反対も真理であることを、精神的な立場というものはどれもひとつの極であり、それには同等の対極があることを。連想を大切にするという限りでは子供だが、他のことも心得ている。それ故こうした読者は、いや、と言うより、この段階にある時の私たちは

誰でも、何であれ好きなものを読めばよい、小説でも文法書でも時刻表でも印刷の活字の見本でもかまわない。私たちの想像力、連想力が完全に高揚している時には、目の前の紙に書いてあることなど読みはしない、読んでいる本が与えてくれる様々の刺激とインスピレーションの流れのなかを泳いでいるのだ。(中略)こんな状態の時には赤ずきんちゃんの童話が、宇宙進化論や哲学や、目も綾なほどエロティックな文学に読めたりする。たばこ箱の“Colorado maduro”も読むに値するものとなり、言葉、文字、語の響きと戯れながら、心の内で、知と追憶と思想の何百もの王国を歷程することもある。⁽⁶¹⁾

1920年当時の問題意識を反映して、このエッセーには『クリングゾール』や『シッタールタ』を想起させる表現が散見されるが、「絨毯の模様や壁の石の配置も、選りに選りぬかれた文字でいっばいのこのうえなく美しい頁と全く同等」⁽⁶²⁾な、「路傍の石がゲータヤトルストイと同等の意味を持つ」⁽⁶³⁾読書の第三段階の世界は『東方巡礼』第一章ブレイムガルテンの祝典に、あたかもメルヒェンのように詩的な筆で書きとめられた。第五章、「結社」のアルヒーフで「書簡 (Bundesbrief)」を手にした H.H.の脳裡に蘇るこの祝典の記憶は、友人ロングスの姿に集約される、「夜の庭園で彼がギリシア語やヘブライ語の記号を書くと、それが鳥や龍や蛇となって宵闇に消えてゆく様」⁽⁶⁴⁾。ヘッセにとってポエジーの手応えとでも言うべきものだったのだろう。1932年9月、ギュンター・アイヒに宛てた手紙には「私のあの作品、一人の老いゆく詩人の告白は、あなたが言い当てられたように、まさしく表現し得ぬものを表現し、言い表し得ぬものを想起させようという試みです」⁽⁶⁵⁾という一節があるが、元来表現され得ぬものこそ H.H.の筆を縛った「結社の機密」であり、純粋なポエジーの世界であった(第二章、レオ失踪後の「書簡」論争はおそらく、現代におけるポエジーの可能性に対するいくつかの立場をメルヒェンのオブラートにくるんでみせたものだろう)。このポエジーの世界は時と

空間を超えた人類の精神的所産の殿堂である。『本の魔法』にはこう書かれている。

昨日は庭か公園か原始林と見えたものが、今日、明日には実は寺院だったとわかるだろう。千のホール、千の館を持つ寺院、そこにはあらゆる時代、あらゆる民族の精神が集い、新たな覚醒を常に待ち望みながら、くりかえし、多声多様な己れの現象形態が「一（Einheit）」であることを体験しようと身構えている。⁶⁶⁾

ヘッセが「東洋の知恵」と呼んだ万物一元の思想、更に、根源の「一」を踏まえ、むしろ現象の「多」を志向する「中国の知恵」がここには全くヘッセ流に消化され、精神世界における一種のパツィフィスムスに覆われている。

H.H.の歩みが一種のパターンに組み込まれていることは既に指摘した。第五章で幹部たちに呼びかけるレオの言葉はそれを簡潔に示しているが、今少し詳しく『神学断想』にはこうある。

人間化の道は無辜素朴（楽園、幼年期、責任というものを知らぬ前段階）に始まる。ここから、罪へ、善悪の知へ、文化、倫理、宗教、そして理想的人間像のもたらす数々の要求へ到る。この段階を真剣に、分化した個人として体験し尽くす者には、最終的に絶望が訪れずにはいない。つまり、数々の美德を実現し、要求に完全に従い、十分にその僕たることなど不可能である、正義は到り難く、善たることは満たし難いという洞察である。この絶望の行き着く先は、破滅か、もしくは精神の千年王国、倫理と定め彼岸の体験である。恩寵と救い、新たな高次の無責任状態、一言でいえば信仰に突入するわけだ。この信仰の形態やあらわれ方がどうであれ、その内容は常に同一である。私たちは可能な限り善を目指すべきであろうが、この世と自分自身の不完全に対して責任はない、

私たちは自ら支配するのではなく、支配されるのであり、私たちの認識を超えたところにひとつの神、もしくは「ソレ」が存在し、私たちはその僕であり、この者に自身を委ねてよい、これである。⁽⁶⁷⁾

ヘッセはこの「ヨーロッパ的な、ほぼキリスト教的な表現」⁽⁶⁸⁾と同じ内容が、かたちこそ異なれ、インドのパラモン教にも中国の老子の教えにも見いだされることを指摘し、彼自身の感慨を次のように記している。

私個人について言えば、これらきわめて重要な精神的体験の数々から、徐々に、数年、数十年の中断をはさみつつ、インド人、中国人、キリスト教徒に人の営みが同じように解釈されているのをくりかえし発見しながら、そこに、ある中核的問題の予感が裏付けられ、かつ、それが何処でも相似の象徴で表現されているのに気付いたのである。人間はあることを志向しているのだ、人の苦悩、人の希求は地球上どこでもどんな時代にも、あるひとつのもの (Einheit) なのだ、このことを私に確証してくれるのは、これら数々の体験を措いて他にない。⁽⁶⁹⁾

H.H.の歩みはこの中核的問題の「ヨーロッパ的文学的表現」とでも呼べばよいだろうか。最もインド的東洋的外観をもつ『シッダールタ』に腐心していた時ですら、ヘッセは彼の「東洋の知恵」を、ヨーロッパに生い育ち、現にヨーロッパ世界にあるヨーロッパの詩人として体験し、これに表現を与えようとしていた。続く『湯治客』『ニュルンベルクの旅』そして『荒野の狼』はある面で、『シッダールタ』で獲得され表現されたものを彼自身の生の場に検証し表現しようとする試みでもあった。時代を生き、時代の問題を担うヨーロッパ人としての自覚の中で彼の「東洋の知恵」はヨーロッパ的に深められた表現をとってきたように思える。『シッダールタ』でインドの衣を纏っていたヘッセが『東方巡礼』ではヨーロッパに生まれた文学者である自分自身

の衣を纏っている。時代と自分の立場との乖離感が強まるにつれ、時代を超えた人類の精神の営みによせるヘッセの想いも強まっただろう。その精神世界とのつながりをヘッセは、おそらくどこまでもヨーロッパ人として『東方巡礼』では表現しているのである。「結社」とは、万物一元の「一（Einheit）」の立場がヘッセ個人の底に深化したかたちなのだ。

シッダールタは彼の知恵を、彼の悟りを、もどかしい言葉でゴヴィンダに語ったが、H.H.は（或いはヘッセは）この精神の殿堂から何処へ向かおうとするのだろうか？

整理票の指示する場所に彼が見いだしたのは奇妙な彫像だった。二つの像が背中であつて合体している。弱々しく不安定な像はH.H.、力強い像はレオの姿をしている。そして、透明なこの像の中に動いているものがあつた。

何かが、きわめてゆるやかな、かすかな、しかし絶えざる流れのようなもの、溶解のようなものが生じている、それは私の肖像からレオの像の中へ溶けている、移動している。私の像は徐々に徐々にレオに己れを捧げ、溶けこもうとしているのだ、レオを養い、強めようとしているのだ。やがて一方の像から出た実体はすべて他方に流れ入り、ただ一つの像、レオが残るだろう、そう思われた。彼は必ず栄え、私は衰える。⁽⁷⁰⁾

H.H.は再びブレイムガルテンの祝典を思い出す。精神世界の住人たちの供宴のさなか、H.H.の心を捉えたことがあつた。古今の文学世界の作家と作中人物のこの集いでは、存在感においても姿の明確さにおいても、例外なく作中人物がその創作者を凌いでいる。彼は偶々近くにいたレオにこれを問いかけてみた。レオはその問いを訝しみながら、それが「掟」なのだと答える。

「掟？ どんな掟なんだ、レオ？」

「奉仕の掟ですよ。永く生きようと望むものは仕えねばならぬ。しかし

支配を望むものは、永く生きることはない。」

「では何故、多くの人は支配を手にしようとするのだろうか？」

「知らないからです。支配するために生まれる者はほんのわずかです。支配する時、彼らは晴れやかで健やかです。しかしほかの者がさんざん骨を折って主^{あまじ}になっても、皆、おしまいは無です。」

「君の言う無とは何だろう…レオ？」

「例えばサナトリウム行きですね。」⁽⁷¹⁾

“Was lange leben will , muß dienen. Was aber herrschen will , das lebt nicht lange.” とは、マタイ伝20章24～28節（マルコ伝10章42～45節）のイエスの言葉（“Wer unter euch groß sein will , der soll euer Diener sein ; und wer unter euch der Erste sein will , der soll euer Knecht sein.” usw.）をヘッセ流に老子風のパラドキシカルな格言にまとめたものだろう⁽⁷²⁾。従者レオが「結社」の最高幹部であったように、詩の世界では最も純粹に仕える者が最も大きな者である。すでに1920年、ヘッセは「奉仕」が個人の最高の自由であると主張しているが⁽⁷³⁾、これが文学的形態をとって初めて定着されたのは『ゴルトムント』のダニエル修道院長であると筆者は思う。『東方巡礼』ではレオという姿をとって作品の中心に据えられた。「告白の文学」という足場から、ヘッセが安んじて自己を託してきた作品の主要人物の背後にそれまで隠されていた純粹な詩と精神の世界が⁽⁷⁴⁾、『東方巡礼』にあって初めて明確なかたちを得ると同時に、具体的に作品の中心に据えられたのである。二身合体の像がミレクの言うように、H.H.が再び筆を執る可能性と芸術への奉仕による不滅の保証を暗示するものかどうか⁽⁷⁵⁾、筆者は疑問なしとしないが、作家としてのヘッセにとってそれが、精神世界、ポエジーの世界の純粹な形象化を志向するのは確かである。シッタールトの「知恵」はそのままに、ヘッセ自身のうちに消化され深化されたかたちをとりながら、そこから発されるのは愛ではなく、ここでは警告の声だ。『東方巡礼』にはこうした彼の姿勢

の（或いは視線の）転換が現われている。

テキスト並びに参考文献

- Hermann Hesse : Gesammelte Werke in zwölf Bänden, Suhrkamp Verlag 1970
（以下, G.W.と略す）
- Hermann Hesse : Gesammelte Briefe Bd. 2, Suhrkamp 1979（以下, G.B.と略す）
- Volker Michels (Hrsg.) : Materialien zu Hermann Hesses
》Siddhartha 《 Bd. 1, Suhrkamp 1977（以下, M. zu 》 Sid. 《と略す）
- V.Michels (Hrsg.) : Materialien zu Hermann Hesses
》Steppenwolf 《, Suhrkamp 1979（以下, M. zu 》 St. 《と略す）
- Josef Mileck : Hermann Hesse Dichter, Sucher, Bekenner, C. Bertelsmann
Verlag 1978
- Martin Pfeifer : Hesse-Kommentar zu sämtlichen Werken, Winkler Verlag 1980
- Adrian Hsia : Hermann Hesse und China, Suhrkamp 1981

注

- (1) G.W. Bd. 11, S. 88f..
- (2) G.W. Bd. 2, S. 282.
- (3) G.W. Bd. 8, S. 323.
- (4) ebd. S. 327.
- (5) ebd. S. 324.
- (6) ebd. S. 329.
- (7) ebd. S. 338.
- (8) ebd. S. 338.
- (9) Mileck, S. 213~231.
- (10) ミレックはこの危機の原因を「ゴルトムントとの余りに密接な自己同一化」に求めている（S. 213）。
- (11) ミレック, S. 232.
- (12) ebd. S. 213f..
- (13) G.W. Bd. 11, S. 89. 因みに、『東方巡礼』の「謎かけ」がヘッセ個人の趣味と彼の生活圏とに強く彩られていることを考えれば、ここにも、自らをキャンバスとして時代

の問題に答えを提示しようという中期の姿勢がなお認められる。

- (14) G.B. Bd. 2, S. 299.
- (15) ebd. S. 346f.. 1932年9月, G.アイヒ宛書簡参照。
- (16) M. zu Sid. 《 Bd. 1, S. 32.
- (17) Vgl. G.W. Bd. 8, S. 282f..
- (18) ミレク, S. 219.
- (19) M. zu Sid. 《, S. 148.
- (20) ebd. S. 148. 「信仰のないフォルムなどありません, そしてそれ以前に絶望せずしては, それ以前に(以後にも)カオスを知ることなしには, いかなる信仰もないのです。」ヘッセのいうフォルムとは単に作品の構成を指すのではない, むしろ, 作品を創り上げて行くうえでの, ひとつひとつの「正確な表現」と言った方が良い。なおかつそれは, 文字に定着された作品以前の作家自身の姿勢も含むものである。M. zu Sid. 《 Bd. 1, S. 83f.(1919年4月4日, M.シュヴァルツェンバッハ宛書簡)及び, S.207(1932年4月3日, H.ヴェルティ宛書簡)参照。
- (21) M. zu Sid. 《Bd.1, S. 12.
- (22) ebd. S. 13.
- (23) ebd. S. 13.
- (24) ebd. S. 122.
- (25) ebd. S. 131.
- (26) ebd. S. 29 (1921年の日記) 及び, 前掲のシュヴァルツェンバッハ宛書簡参照。
- (27) ヘッセの強調する, 創作における「誠実さ」もこの文脈において理解できるが, この場合, 言葉を扱う作家としての彼の態度がより前面に現れるようだ。「ヨーロッパの没落」という言葉で表明された, 彼の内なる旧世界の諸価値の相対化と崩壊は, 世界観, 人生観といった次元をより下って, 詩人としての自らのものの感じ方, それと言葉のつながりすら流動化させただろう。ここで「誠実さ」とは, 無定形のカオスから力ある言葉によって自らの世界を救いだし, 自らをとりまく世界とそこにある自己を言葉によって再認識, 再設定することとなる。ヘッセにとって困難であったのは, この世界, 或いは認識が同時に常に, 現実の生の原理でなければならなかったことだ。現実の生を離れたところに美的世界を創造し, そこに永住するのは彼の欲するところでも為し得るところでもなかった。この創作における「誠実さ」は彼の言う「フォルム」を問うことでもある。
- (28) G.W. Bd. 8, S. 323.
- (29) ebd. S. 343.
- (30) ebd. S. 352.

- (31) ebd. S. 351.
- (32) ebd. S. 354.
- (33) ebd. S. 355.
- (34) レオの住所は Seilergraben 69 a, この69は、大極図 (☯) を想起させる。ヘッセが愛読したりヒャルト・ヴィルヘルム訳『老子』には、第一章の注釈に「有無一元という大いなる神秘」を象徴する図として紹介されている。この図の表わす陰と陽の同時混在 (Ineinandersein) は、現象界の個別的現存在と即自向自的絶対存在が現象において異なっても真実在においてはひとつであることを示している (Lao Tse: Tao Te King Das Buch vom Sinn und Leben. Übersetzt und mit einem Kommentar von Richard Wilhelm. Eugen Diederichs Verlag 1982, S. 201f.)。ヘッセにとって「中国の知恵」の中核は現象界と実在界の等価性、更には遊戯としての現象界への「愛」にあった (『世界文学をどう読むか』 G.W. Bd. 11, S. 368ff..)。なお、この69については、Pfeifer S. 214 におもしろい解釈が紹介されている。
- (35) G.W. Bd. 8, S. 356f..
- (36) ebd. S. 367.
- (37) ebd. S. 369.
- (38) ebd. S. 370.
- (39) ebd. S. 373.
- (40) ebd. S. 378.
- (41) ebd. S. 379.
- (42) ebd. S. 379.
- (43) ebd. S. 382.
- (44) ebd. S. 388.
- (45) G.W. Bd. 11, S.88.
- (46) G.W. Bd. 8, S. 367.
- (47) ebd. S. 349.
- (48) Vgl. “Bekenntnis des Dichters” (1929), G.W. Bd. 11, S. 243f..
- (49) たとえば、1927年4月13日の H. Wiegand 宛ての手紙 (G.B. Bd. 2, S. 171ff..).
- (50) G.B. Bd. 2, S. 230f..
- (51) ebd. S. 234.
- (52) G.W. Bd. 8, S. 282f..
- (53) ebd. S. 276.
- (54) ミレク, S. 227ff..
- (55) G.B. Bd. 2, S. 228.

- (56) ebd. S. 228.
- (57) ebd. S. 229.
- (58) ebd. S. 230.
- (59) ebd. S. 230.
- (60) G.W. Bd. 11, S. 249. 続けて更に次のような一節もある。「確かに精神は民主化されたように見えるし、ある時代の精神財は、読むことを学んだ万人のものであるように見える。しかし実際は、大切なことはすべて人眼に触れず秘密裡におこっている。それはまるで、地下のどこかにある秘密の司祭集団、或いは結社 (Verschwörer-schaft) があって、無名に身をひそめつつ精神の運命を導いているかのようだ。彼らは数世代に及ばずに足る支配力と爆破力で武装した使者を、何の身分証明も与えず変装させ地上へ送りこみ、世の人々が、彼らによる啓蒙を喜びながらも、眼前で行われている魔術に何ひとつ気付かぬよう配慮しているというわけなのである。」(S. 250f..)
- (61) G.W. Bd. 11, S. 237f..
- (62) ebd. S. 238.
- (63) ebd. S. 239.
- (64) G.W. Bd. 8, S. 374. ロングスはユング派の心理学者で、ヘッセがユング・フロイトの精神分析学に興味を抱くに当たって案内役をつとめたラング博士のことである。第一章では単なる「謎かけ」、一種の「名前遊び」に過ぎないが、第五章ではブレイムガルテンの祝典の記憶を超えて、ポエジーの世界の象徴にまで拡大されている。H.H.の夢の女王、ファートメも、第五章では青春の日の夢想すべての象徴となり、ポエジーの魔法を失った現在への痛切な嘆きを呼び起こす (S. 375f..)。 「謎かけ」の意味が変化しているのだ。「謎かけ」の人物をヘッセの実人生に還元するだけでは、その十分な深さを測り得たとは言えない。
- (65) G.B. Bd. 2, S. 346f..
- (66) G.W. Bd. 11, S. 252.
- (67) G.W. Bd. 10, S. 74f..
- (68) ebd. S. 75.
- (69) ebd. S. 76.
- (70) G.W. Bd. 8, S. 389f..
- (71) ebd. S. 341f..
- (72) 『東方巡礼』と老荘思想については、Hsia が主にレオと老子の共通点を指摘している (S. 262ff..) が、言わずもがなという感を否めない。確かにレオはヴァズデーヴァの系に立つ人物であり、その点で老子とのつながりはある。しかしここでむしろ注意を引くのは、レオにあって老子的要素が完全にヘッセのものとして消化されているこ

とである。レオにはヴァズデーヴァのような神秘的な趣はない。時折り暗示される知恵の片鱗を除けば、この人物を特徴付けているのは素朴さ、自然さ、健康さ、謙虚さ、そして周囲の世界との（外面上の）調和である。

- (73) M. zu Sid. 《 Bd. 1, S. 107.
- (74) この点については『荒野の狼』を考えてみれば良い。ハリー・ハラーの「不滅者」の世界は、ハラーの苦悩の彼方に時折遠望されるのみである。1932年3月、A.クービーンに宛てた手紙では『東方巡礼』と『荒野の狼』、及び「結社」と「不滅者」の世界の平行な関係が明言されているが、その意味するものはともかく、「不滅者」はその表現において、ハラーの個性を完全に脱却した客観的実在を獲得していると言い難い。言うまでもなくこの変化は、ヘッセの対文学姿勢の変化を映したものである。
- (75) ミレク, S. 235.